がん社会を診る

中川　恵一

予防教育、子から親へ

香川県宇多津町は瀬戸内海に面した風光明媚（めいび）な町です。県内で最も小さな町ですが、人口密度、人口増加率、出生率、婚姻率などは県内1位。平均年齢、高齢化率などは県内最下位です。

「住民一人ひとりが生涯健康でいきいきと活躍できるまち」をスローガンに、町民の健康づくりにも積極的に取り組んでいます。

谷川俊博町長とご縁があり、2013年度より毎年、町内唯一の公立中学校である宇多津中学校の2年生を対象にがん教育授業を担当してきました。生徒たちが、がんに関する正しい知識を身につけ、家族や身近な人とがんについて話し合い、がんを予防する行動をとることができるようになってほしいと考えながら授業を行ってきました。

また同年度から隔年で、一般町民を対象にがん啓発のための講演会も担当しています。がん全体で6割以上、早期であればほとんどが治る時代ですが、「がん＝死」と誤ったイメージを持つ住民も少なくありません。「何か見つかると怖い」という理由でがん検診を受けない方々に定期的受診の重要性を認識していただき、行動変容を促していきたいと努力しています。

がん教育を受けた生徒は保護者などの大人にがん検診の受診を勧めていることが私の調査からも分かっています。そして、実際に宇多津町でがん教育を開始した13年度から、町民のがん検診受診率が急上昇していることが確認されました。とくに子宮頸（けい）がん検診と乳がん検診について、子育て世代や働き盛り世代の受診者が増えているのも大きな成果と言えます。

宇多津町の乳がん検診受診率はがん教育前の12年度は22・3％でしたが、13年度は20・8ポイント増の43・1％、14年度では45・2％と12年度から22・9ポイントも増加しました。同様に子宮頸がん検診は、12年度の30・7％が13年度に19・1ポイント増の49・8％、14年度は50・3％と12年度から19・6ポイントも増加しました。

がん教育の開始後に親世代のがん検診受診率が急上昇した例は埼玉県の熊谷市などでも確認されています。がん教育は子供たちの将来を支えるだけでなく、「逆世代教育」を通して、日本人全体をがんから守る力を持っていると確信しました。

（東京大学病院准教授）

イラスト・中村　久美